

にしのはら

## 西原観音堂の石造物

蘭島の南側に位置する西原地区の西原観音堂境内には、古くは鎌倉・室町時代の五輪塔（ごりんとう）や宝篋印塔（ほうききょういんとう）、江戸時代の地藏や明治28年（1895）につくられた手水鉢（ちょうずばち）など、約20基の石造物が祀りされています。

五輪塔とは、鎌倉時代以降に供養塔や墓石として盛んに造られた石塔の一種ですが、石造物群のほぼ中央にある五輪塔には、地輪（ちりん）と呼ばれる方形の基礎の部分に永享（えいきょう）4年（1432）という年号が



刻まれています（写真）。これは、清水地区では年号が刻まれた石造物としては最古のもので、西原地区で古くから集落が営まれていたことを証明する貴重なものです。

この五輪塔の隣には、「庚申（こうしん）さん」と呼ばれる青面金剛

（しょうめんこんごう）の石像があります。庚申講とは、江戸時代にひろがった民間信仰で、人の体の中にある三尸（さんし）の虫が、60日に一度回ってくる庚申の日の夜、人が寝ている間に体から抜け出し、神にその人の悪事を告げにいくといわれ、その報告により寿命が縮まるというので、人々は庚申の日は寝ずに「庚申さん」を供養したことから、各地で庚申の石塔がつくられました。

また、庚申像の台座には、三匹の猿が刻まれています。これは、「見ざる（見猿）・聞かざる（聞か猿）・言わざる（言わ猿）」のいわゆる三猿（さんえん）で、自分たちの罪を見聞きしたり、神に告げないで欲しいとの願望を表現したものです。

風雪に耐え、長い歳月を経てたえずむ石造物は、物言わぬ石ではありますが、先人の信仰や温かい心を今に語りかけてくれます。

